

## ネパールからの留学生たち その3

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン  
理事長 マナングール マダーブ ナラエン

留学生たちの帰国後の詳細な記録はない。海外へ旅したことは経済発展や人類皆平等といった新しい考え方を知るのに役立った。しかし当時はまだそのような考えは早すぎた。留学生たちは政府の監視下に置かれた。

- ① ジャンガ・ナルシン・ラナ(22歳)は帰国後、兵器工場で働き、銃の設計も行った。彼は、はっきり物事を言う性格で、どちらかと言えば王制派でもあり、日本で見てきた天皇の権威や機会均等について何度か主張した。ある発言をきっかけに彼は西ネパールのピュタンの行政長官に任命され、二度と家に戻ることは許されなかった。
- ② バクタ・バハドゥル・バスニヤト(19歳)も兵器工場に配置された。銃の設計、製造を行った。
- ③ ヘム・バハドゥル・ラジバンダリ(22歳)は兵器工場で様々な機械に関連した作業を受け持った。彼は何年ものあいだ、カトマンズの周辺で吊り橋建設に従事した。その吊り橋は今でも残っている。造幣局の局長にもなっている。また第二次世界大戦の時、英国軍グルカ部隊にも従軍している。
- ④ バラ・ナルシン・ライマジ(20歳)も兵器工場に配置された。そして西部丘陵地帯のバグルンにある銅山の責任者になり、銅山から採れた銅から1パイサと5パイサ硬貨を製造している。後にはこの地区の知事にもなった。彼の尽力により、この地域の人々は土地と銅山からの徴税を免れ、土地の人々から親しまれた。チベット、ラサの総領事にも任命されている。第一次・第二次世界大戦ではインドの英国軍同盟軍に従軍した。彼はネパール語・日本語の会話集を執筆したものの、当時の状況からトラブルを恐れて出版はしなかった。
- ⑤ ディープ・ナルシン・ラナ(18歳)はジャンガ・ナルシン・ラナ(22歳)の弟で、日本から果実や花を持ち帰った。彼が東部タライのサブタリ郡で造ったチャンドラ・

ナハル運河はネパールで最初の灌漑工事となった。後にダンクタの知事にもなった。

⑥ ルドゥラ・ラル・シン(27歳)と⑦ ビチャル・マン・シン(25歳)がどこで働いていたかは不明である。

⑧ デヴ・ナルシン・ラナ(20歳)は病のために早めに帰国し、まもなく亡くなった。

側近の何人かはカトマンズの製革所で雇われ、一人は兵器庫の会計になった。桑が植えられ養蚕が試みられたが、うまくいかなかった。残念ながら、どの試みも組織的に行われることがなかったようだ。

彼らの業績の記録は1934年カトマンズ大地震の際に失われてしまった。

その後暫く、国費での日本への留学が途絶えた。河口慧海らの協力で私費で留学したパドマ・スンドル・マッラは日本で勉強した後、アメリカへ渡りネパール初の電気工学エンジニアとなった。帰国した彼を政府は渡航許可を得なかったという理由でアウトカーストにした。そうはなってもインドの電力会社で働いた。その後、ネパールで電力プロジェクトにも関わった。

日本に留学生を送る計画は50年以上もの間、実現することはなかった。

最初は文部省の奨学金により、後には非政府組織のプログラムにより、ネパールから日本への留学生が定期的に送られるようになるのは1957年のことである。

私も日本に留学生として来日した一人である。私はネパールで日本語を学び、ある程度話せるようになってから来た。そのため、言葉による苦労はそれほど感じなかった。そして移動も空路10時間程で来られるようになっている。

留学は自国を振り返るチャンスでもある。自分自身の将来を方向付けるのはもちろんのこと、その国の文化に直に触れ、習慣の違いを経験し、技術や独自性、精神を学び、広い視野に立てる利点がある。今は私費留学が増え、学び方も様々である。